

20 世紀における「きもの」文化の近代化と国際化  
—物質文化・表象文化の視点から—

The Modernization and Globalization of Kimono Culture in the Twentieth Century  
— An Analysis of Kimono and its Representation in Multiple Media —

森 理恵\*<sup>1+</sup>, テリー・ミルハプト\*<sup>2+</sup>, セーラ・フレデリック\*<sup>3+</sup>, 鈴木 桂子\*<sup>4+</sup>  
Rie Mori\*<sup>1+</sup>, Terry Milhaupt\*<sup>2+</sup>, Sarah Frederick\*<sup>3+</sup>, and Keiko Suzuki\*<sup>4+</sup>

\*1 京都府立大学大学院生命環境科学研究科 京都市左京区下鴨半木町 1-5

Graduate School of Life Environment, Kyoto Prefectural University,  
1-5 Hangi-cho Shimogamo Sakyo-ku, Kyoto, Japan

\*2 インディペンデント・スカラー

Independent Scholar

\*3 ボストン大学近代文学および比較文学部

Dept. Modern Languages and Comparative Literature, Boston University

\*4 立命館大学衣笠総合研究機構

Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: Throughout the twentieth century, the production, distribution, and consumption of Japanese kimono underwent tremendous changes as the Japanese nation made efforts to be perceived as modern and international. By focusing on its material form as well as representations of kimono in texts and images both within Japan and beyond its borders, this research group intends to reveal how shifts in the design and use of the physical garment and its representation in multiple media throughout this one-hundred-year span were intimately tied to the Japanese nation's evolving status in a dynamic global setting.

The multi-disciplinary research group comprises four members; two Americans and two Japanese. Terry Milhaupt investigates chronological shifts in kimono design by examining the materials and decorative techniques involved in the production of kimono for domestic and international consumption. Sarah Frederick analyzes representations of kimono in American and Japanese literature and popular media. Keiko Suzuki focuses on kimono made for export, as tourist art, souvenirs for foreigners, and kimono produced and consumed in foreign countries. Rie Mori investigates the experiences and consciousness of those who wear kimono, and considers how the kimono was perceived both within Japan as well as in its colonized territories. As the leader of the group, Mori will integrate the research team's results, and position their findings within the broader scholarly debates of gender, Orientalism, and nationalism.

---

\*1) [r\\_mori@kpu.ac.jp](mailto:r_mori@kpu.ac.jp)

## 目的

日本の「きもの」は 20 世紀に、製作・流通・消費の各段階において、近代化と国際化を達成したと考えられる。これは 19 世紀後半に成立した近代国民国家日本の国際関係の推移を受けたものであり、また、21 世紀である現在の「きもの」文化に連なるものである。本研究は、「きもの」の「モノ」としての物質文化的側面と、テキストやイメージとしての表象文化的側面の双方に着目することにより、20 世紀に「きもの」がいかにして近代化・国際化を達成したのかを、総合的に明らかにすることを目的とする。

なお研究構成員の分担は次のとおりである。テリー・ミルハプトは 20 世紀の「きもの」の実作品と図案を分析することにより、物質文化としての「きもの」文化を研究する。セーラ・フレデリックは日本と米国の文学作品や大衆メディアにおける「きもの」のテキストとイメージを分析することにより、表象文化としての「きもの」文化の研究を担当する。また鈴木桂子は海外を意識して作られた輸出品・観光芸術・土産品としての「きもの」と、それから派生して海外で生産・消費された「きもの」の象徴的意味を研究する。そして森理恵は「きもの」着用者の体験や意識、植民地と「内地」における「きもの」のありかたを研究するとともに、各構成員の研究結果を踏まえ、ジェンダー、オリエンタリズム、ナショナリズムの諸理論を活用し、「きもの」文化の近代化・国際化を総合的に考察する。

## 方法

本研究は以下の方法によりおこなう。

- (1) 日本の国内外に保管されている、20 世紀の「きもの」実作品とその図案の調査
- (2) 20 世紀の「きもの」が表象されている出版物、映像資料、貿易品等の調査
- (3) 20 世紀に「きもの」の製作・流通・販売にたずさわった人々、および、20 世紀に「きもの」を着用・消費していた人々へのインタビュー

## 今年度の活動

- (1) 7 月～8 月にかけて首都圏において資料収集、情報収集をおこなった。
- (2) 11 月に関西地方において資料収集、情報収集をおこない、研究構成員間で相互に研究発表、および討論をおこなった。
- (3) 2 月に米国東海岸において資料収集、情報収集をおこない、研究構成員間で相互に研究発表、および討論をおこなった。

## 結果

11 月と 2 月の研究発表と討論の結果は次のとおりである。

- (1) "kimono" という語の定義について。これは、日本語で研究の発表をしていく際に、「きもの」をひらがな、カタカナ、漢字、またはローマ字のどれで表記していくか、という決定にも係わる。各々が研究を進めていく過程で、様々な資料が、「kimono」という語をどのように表記しているのか、注意する必要があること、そして、その表記の違いに意味があるのか、それともそうでなく、書き手のスタイルにより様々に変わるもので、それほど意味のないものなのか、を見極める必要があることが確認された。いろいろな意味と書かれた形式の歴史的な変遷をみることができようし、「kimono」という語がどのように使われたのか、ある特殊な文脈においてどういったことを意味するのか、また、そういった意味とその表記の間の関係の有無

については、これから留意すべきである。

(2) 全員の共通した見解として、「きもの」を、西洋対東洋という2元論的な議論を越えたものとしてとらえること、「きもの」文化をグローバルなコンテクストに置いて考えていくこと、の2点が確認された。

(3) テリー・ミルハブトは、「きもの」の製造または偽造」をテーマに、20世紀における「きもの」の消費と機能の変化が、同時代の「きもの」に関連した様々な価値観(歴史的、経済的、材料的、文化的、機能的)の変化と、どのように関係しているかを研究している。特に、「きもの」生産者や販売者としての、百貨店(三越)、商社(丸紅、千総)、地方産業(銘仙、久留米緋)に焦点を当てて調査中であり、これらの製造者が、どのような市場をターゲットとしていたかを考察中である。

(4) セーラ・フレデリックは、「イメージとテキストにおける「きもの」と洋服」をテーマに、「きもの」着用の姿が、服装のジェンダー差との関連でどのように表現されてきたかを研究中である。たとえば、少女雑誌の連載小説や挿絵において、「きもの」は、20世紀日本の少女たちにとってはエキゾチックで空想的なものであり、必ずしも伝統的なものではない。そうした雑誌において、「きもの」は、中国服や洋服と変わるところはないのである。また、同時期の北米における「きもの」イメージについても調査・研究を進めている。

(5) 鈴木桂子は、「「きもの」文化の輸出」をテーマとして、ビジネスや観光で日本にやってきた外国人が、どのように「きもの」を表象したか、また、日本人が、外国人向けの観光芸術品の中に、自文化として「きもの」文化をどのように認識し、使用しているか、を視覚文化・物質文化の調査を通して調べている。日本のイメージが、中国・韓国・その他のアジアの国のそれと混ざり合っている状況にも目を向け、日本が、「きもの」文化において、セルフ・オリエンタライジングと同時に、日本化・西洋化をしてきた可能性について考察中である。

(6) 森理恵は「「きもの」のナショナリズム、コロニアリズム、グローバリズム」をテーマとして、植民地における「きもの」文化の受容／非受容／反発の様相について調査すると同時に、戦時下の「内地」と占領下の日本における「きもの」文化の変容についても調査を進行中である。現在のところ、植民地において、支配者側からも被支配者側からも、「支配者日本」の象徴として、「きもの」が表象されていること、そのような「きもの」の象徴性が占領下において複雑な変容を迫られている様子が確認できており、ひきつづき考察を進めていく予定である。

(7) 以上を総合し、来年度の目標として、共同調査や討論だけでなく、国際学会でのグループ発表を計画する。

## 文献

1. 横林結、森理恵:「洋裁・洋装の普及と「和服」－1950年代における「直線裁ち」の意味－」, *京都府立大学学術報告生命環境学*, No.61, pp.9-17 (2009)
2. 東朋美、森理恵:「日常的着物着用者(女性)の着物着用実践のありかたと着物に対する意識」, *京都府立大学学術報告生命環境学*, No.60, pp.1-19 (2008)
3. 森理恵:「「キモノ」の洋装化と民族衣装「キモノ」の成立」, *武庫川女子大学関西文化研究叢書*, No.7, pp.96-122 (2008)
4. 森理恵:「キモノの女性化、ファッション化と民族衣装化」, *愛媛県歴史文化博物館展覧会図録『ときめくファッション～小町娘からモダンガールまで～』*, pp.114-119 (2006)
5. 森理恵:「「キモノ美人」成立過程についての研究－「日本美術史(染織史)」の形成と日本画、和装界の動向－」, *イメージ&ジェンダー*, No.3, pp.76-95 (2002)
6. Terry Satsuki Milhaupt: “In the Guise of Tradition: Serizawa Keisuke and his Eclectic Designs,” in *Serizawa: Master of Japanese Textile Design*, edited by Joe Earle. New Haven: Yale University Press and the Japan Society, (2009).
7. Terry Satsuki Milhaupt: “Facets of the Kimono: Reflections of Japan’s Modernity (Facetten des Kimono im Spiegel der Moderne),” in *Arts of Japan: The John C. Weber Collection*, edited by Melanie Trede with Julia Meech. Berlin: Museum of East Asian Art, National Museums Berlin, (2006).
8. Terry Satsuki Milhaupt: “Second Hand Silk Kimono Migrating Across Borders,” in *Old Clothes, New Looks: Second Hand Fashion*, edited by Hazel Clark and Alexandra Palmer, Oxford and New York: Berg Publishers, (2005).
9. Sarah Frederick: *Turning Pages: Reading and Writing Women's Magazines in Interwar Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, (2006).
10. Keiko Suzuki: “The Making of Tōjin: Construction of the Other in Early Modern Japan.” *Asian Folklore Studies*, No.66, pp.83-105, (2007).
11. Keiko Suzuki: *The Tale of Tōjin: Visualizing Others in Japanese Popular Art from Edo to Early Meiji*. UMI (ProQuest), (2007).